牧場経営で創業した1897年来、群雄割拠のヨーグルト市場で踏ん張ってきたが2022年に完全撤退。切り開いた新しい市場に今、確かな手応えを得ているようだ。

その制度うれしい

働き続けたいと思える会社とは。総合食品卸の中村角（西区草津港）は入社7年目までの従業員を対象に、4月から奨学金返済支援制度を導入。毎月1万円を7年間、給与に上乗せする。

昨年、奨学金返済に関する社内アンケートを実施したところ、6人いることが判明。中村一朗社長は、

「予想外に多いと感じた。奨学金を借りて学ぼうとする姿勢は真面目で、成長が期待できると考えた。採用活動でも支援制度をアピールし、優秀な人材確保につなげたい」

早速、採用面接の場で「その制度はうれしい」と率直な声が返ってきた。働き方改革も積極的に取り組み、4月には4年連続で「健康経営優良法人2024（中小規模法人部門）」に認定。依然として厳しい経営環境が続く中、今3月期売り上げも過去最高を更新する見通しだ。こつこつと経営改革を図り、決して油断がない。若者から選ばれる経営姿勢こそ成長の決め手なのだろう。

常識を疑う

メイドインひろしま IoT協議会（福井五郎会長）の通常総会が4月22日にあった。日本で最も有名なプログラマーで、プログラミング言語Rubyを開発した、まつもとゆきひろさんがオンラインで「オープンソースソフトウェア流プロダクトマネジメントのすすめ」と題し、講演。これまでのソフトウェア開発の常識を疑う重要性を語った。

日本の多くのIT企業は顧客が無関心だった過程（かかった時間・人員・コスト）の管理にとらわれるあまり、顧客が関心を寄せる製品（何の役に立つのか）を追求しきれていなかったと指摘。プロダクト（製品）とプロセス（過程）のどちらを中心に据えて開発に取り組むべきか、自動車の大量生産を実現したフォードの名言を引き合いに、

「顧客に欲しいものを聞くのではなく、一体何に困っているかを洞察し、その期待を超えることが重要。納期や予算といった約束事以上のメリットを示せれば、顧客の満足度は高まるはずです」

窮地を超えて

葬儀場運営のさいき（東広島市）は3月末、ホテル客室のような宿泊スペースを備える小規模ホール「家族葬つつじ」を同市西条上市町に開業した。

明るい色調のシンプルで落ち着きのある洋室にベッド2台とソファー1台、バスタブ付きの浴室を完備。遺族のためのプライベート空間に特化する新たな切り口で展開し、5年後に全国50施設体制を目指す。コロナ禍の需要低迷期に会社売却を検討するほど追い込まれたという柚木力社長（47）が心境の変化を語ってくれた。

「2014年に先代が亡くなり、四苦八苦しながらようやく軌道に乗せた矢先、パンデミックに直面。どん底を味わい、もう経営は無理だと思った。当時は子が生まれたばかり。その無邪気な笑顔を見ていると毎晩涙が止まらなかった。大手への会社売却を考え、先方の役員らと面談したことも。しかし窮地に追い込まれて初めて、何をすべきか、希望が見えてきた。式を終えてやすらぎ、心の温まる葬儀とすることができないか。日々考えるうち、次第に大きな力が湧いてきた」

ヒロマツグループと連携したプロジェクションマッピング葬に次ぎ、遺族に寄り添う家族葬。決意を秘め、一歩を踏み出した。